

現在より暫く先の未来。

高度な人工知能の発展により生まれた疑似人格付与型のアンドロイド。当初は反発する声もあったが世界的な人口減少は否応なくその社会進出を後押ししていく。その誕生から幾年かを経た後は街中で労働者として、誰かの家族としてアンドロイドを見かけることはそう珍しいことではなくなっていた。

政策により一定数のアンドロイドが生産される他、個人が家族として制作依頼することも可能となった未来。

十代前半程度の姿と精神で作られたアンドロイドは、指定の学校で人間たちと過ごす事が義務付けられていた。

都内とはいえ西の外れ。少し辺鄙な場所にある天音高等学校の教室。

長めのホームルームが終わって中年教師の説教から開放された生徒たちがいくつかのグループに分かれて笑い合っている。

その環の中から外れた隅で一人の少年が帰り支度をしていた。

彼の名は櫻井 悠斗。

天音高校は彼の家から少し離れた場所だったせいで同じ中学の知り合いはゼロ。内気な性格のため積極的にクラスメートに声をかけることもできずに「ぼっち」の状態が二ヶ月程続いている。それでも、彼は進学したことを後悔してはいなかった。

彼と反対側の教室の隅で談笑している女子グループ。明るい声を響かせるそちらにちらり、と目を向ける。

女子のうち数人の首筋には、定規で引いたような分割線が浮かび、手首にはマーキングがされている者もいる。

彼女たちは人ではない。疑似人格を与えられたアンドロイド。天音校はこの地域で唯一のアンドロイド生徒受け入れ可能なモデル校だった。

悠斗が幼い頃から徐々に増え始めたアンドロイド市民。そんな中の彼の初恋は小学生の頃、近所の店員だったアンドロイドの女性。

結局その恋は実ることなく彼女は客の一人と恋に落ち、結婚して何処か遠くの街へと去っていった。

しかし、その経験は悠斗に大きな影響を残したのだった。

人間の女の子に興味がない訳では無いが、恋をするならアンドロイド女子！

そう心に決めて、片道一時間半の通学時間に耐えることを決めたのだっ

た。

そして、その甲斐があったというべきか。彼の理想のようなアンドロイドの少女がその視線の先にいた。

元からの色なのか、交換したのか、薄めの色の長い髪をポニーテールにして垂らし、大きな目を輝かせながら友人の話に相槌を打つ。

市ノ瀬 アヤカ。

明るい性格の彼女はたちまちのうちにクラスの人気グループのまとめ役ようになり、アンドロイドのみならず人間にも友人多数。

最初はその容姿に惹かれていたが、気がつけば彼女の声や話し方を聞いているだけで心が弾むようになっていた。だからといってこちらから話しかける勇気もない。

そんな彼女をまるで盗み見しているように眺めていると、視線に気がついたのか振り返った彼女と目が合う。

するとアヤカはにこり、と笑顔を向けて小さく手を振ってくる。誰にも物怖じせずフレンドリーに接するその性格。それこそが彼女の周りに人が集まる理由なのだろう。

愛想笑いだと解っていても心が躍るのは止められない。数日に一度のビックイベント。

それだけで悠斗は満足だった。

鼓動が跳ね上がったのをクラスメートに悟られまいと、俯き気味に立ち上がって教室を出ていく。

周りの誰も気に留められず彼が出ていった扉を、少しだけ気落ちした目でアヤカが見つめていた。

その週の休日。悠斗の家から電車で小一時間程の電気街。

元々自作ロボットパーツの店が多かった区画は今や、ロボット、アンドロイド関連のショップが並んでいる。

昼下がり、親戚へのお使いをすませた悠斗が色とりどりのロボットショップの看板に目移りしながら道を歩いていた。

昔ながらのいかにもロボット、といった様子の疑似人格を持たない機体も多く売られているが彼が時折立ち寄っているのはアンドロイドのパーツショップ。

一階の売り場は潤滑液や皮膚メンテナンス用のジェル等の消耗品。二階に上がれば充電器内蔵型のベッド等のアンドロイド対応家具類。

悠斗はその脇をすり抜けて更に上階へと進む。

そこから上は交換、補修用のパーツ売り場。疑似人格付与型のアンドロイドが店頭販売されていることはないがそのパーツ類は別だ。

ウィッグのような交換用ヘアパーツ、眼球を取り出したかに見えるアイカメラ。概ねの部品は共通規格化されていて後からでも自由に交換できる。

たまたま並んでいる薄い色のロングヘアパーツと藍色のアイカメラ。その組み合わせにアヤカを思い起こしてどき、とする悠斗。

もちろん、使うあてのないパーツを購入する意図はなくウィンドウショッピングをしているに過ぎない。

悠斗がどうやら購入するつもりもないと思ったのか横にいた客、二十代半ばくらいの男とアンドロイドの女性とのカップルがそのパーツをテにとって吟味し始める。

「ねえ見て見て！ すっごく綺麗だよ、この目！ いいと思わない！ あ、虹彩色変更機能付きだって！」

「あー、まあ……そうだな。でも今日はちょっと予算が……さっき新型の女性器ユニットねだったのお前だろ……」

「う。だ、だってえ……。感度ブースト×3倍だよ！ 試してみたくなるじゃない！ ……どーしてもだめ？ けちー」

少し頬を膨らませながらも幸せそうなアンドロイド。現在ではそこまで珍しくはないアンドロイドと人間の恋人たち。

その光景を見ればどうしてもアヤカの顔が脳裏に浮かぶ。

眩しい笑顔に揺れる髪。一緒にクラスで彼女を眺めるだけでも幸せではあったが。

もう少しだけ、近づけたらいいのに。

その思いを振り払うように首を振れば、片隅に展示してある中古の筐体が目に入った。

頭部を取り外されたマネキン人形のようなその姿、ワンピースの首から接合部の機器が覗いている。

ちょどその背格好はアヤカによく似ている。

悠斗の頭の中でフロアにある部品が組み上がっていく。横においてある頭部フレームに先程のアイカメラがはめ込まれヘアパーツが被さり、組み上がった頭部が宙に浮いて筐体の首にはまり込めば。

「……はあ」

わかっている。ここにあるパーツを組み合わせて瓜二つの人形を作ったとしても、それはアヤカではない。

気がつけば先程のカップルも立ち去り、フロアに人はまばらになってい

る。明らかに購入する意思もない少年にそろそろ店員の目も厳しくなってきた。

ここらが潮時、と悟った悠斗は下りのエスカレーターへ向かって歩き出した。

アンドロイドショップから出て数十メートルほど歩いた時。

悠斗の目は向かいの通り、人混みの中に引き寄せられる。先ほどショップで見た者に似ているがもっと鮮やかな色の髪。

見間違はずもない、市ノ瀬 アヤカ。

「市ノ瀬さん？　なんでこんなとこ……あ」

言いかけて、そうおかしくもないことに気がついた。彼女自身がアンドロイドなのだ、自分で補修品を買いに来ることもあるだろう。

どうしよう、声をかけるべきだろうか。でも自分が趣味だけでアンドロイドショップにいたと知ったらどう思われるだろうか。

いや、そもそも声をかけるような仲でもないのに。でも、だからこそそのチャンスでは。

思考がぐるぐると巡るうち、こちらに気がついてもないアヤカの姿は人混みに紛れ始める。

あと数秒、ここに立ったままならその鮮やかな髪も人混みに紛れて見失うだろう。

その衝動を見透かしたかのように横断歩道の青信号が点滅する。

「……！」

アヤカの姿が完全に人が気に埋もれる前、悠斗は赤色に変わった信号の下を駆け出していた。

人ごみに紛れるようにアヤカの後をつけていく。てっきり目的の場所だと思ったアンドロイドショップを彼女はあっさりと通り過ぎ、しばらく進んだ後に路地裏への道へ入っていく。人影もまばらになったそこでアヤカが気まぐれに振り向けばすぐにバレてしまうだろう。

一瞬、踏み込むのをためらうが好奇心と疑念が不安を上回る。

「でも、確かここ……」

その路地裏もロボット関係の店舗が並んではいるが、正規品の流通やメーカーから降ろされた中古品を取り扱う表通りの店とは違い、半ばジャンクに近い中古パーツや海外製の動作が怪しい商品を取り扱う店ばかり。

「市ノ瀬さん、こんなとこでパーツ買ってるのかな……」

少々意外に思いながら電柱の影に隠れてアヤカの行く先を見定めようとする。

慣れていないのか、きょろきょろと看板を見比べて考え込んでいたアヤカは、とある店の看板を見ると動きを止める。

迷ったような、考え込んだような素振りをしばらく見せていた彼女は、やがて意を決したかのようにその店へ踏み込んでいく。

「あの様子だここに詳しいわけじゃないのかな……あっ……！」

アヤカの姿が店内へと消えてから、悠斗はそちらへ歩いて行く。

その目に入った看板は。

「こ、ここって……」

ピンク色の看板に中の様子が伺えないように目張りされたガラス戸。

その店はアンドロイド用のアダルトショップ。セクサロイド機能関連のパーツ専門店だった。

女性型アンドロイドにセクサロイド機能をつけることは公言するようなことではないがやましいことでもない。

人間のパートナーとなるアンドロイドにはセクサロイドとして機能できるのが付与できるよう設計されている。

ただし、その購入には年齢認証が必須となっている。人間が購入する場合はもちろん、アンドロイド自身が購入する場合でも規定の学校を卒業する事が必須になっている。

言うまでもなくアヤカは悠斗と同じ学年。店に立ち入ることすら違法ではあるが、実際入店するだけなら学生服でも着ていない限りお咎めはない。

ただ、購入と慣れば別だ。

「市ノ瀬さん……そういうの……その、すき、とか……」

脳裏に「彼女」の淫らな姿が浮かぶ。アダルトサイトで見たアンドロイド女性の裸体にアヤカの顔が重なっていく。

いつも制服をおしあげている豊かな胸を晒し、扇状的な目線で悠斗を見つめる。

上気した表情を浮かべた彼女は手で覆っていた左胸を晒すと、乳房をゆっくりと外側に開いていく。

ネットで見た画像のとおりメンテナンスハッチの内部機構が晒され、その中に収められた快楽中枢回路、アンドロイドの性的機能を司る部品が悠斗を誘うように点滅している。

「市ノ瀬さん……あっ……！」

店の扉が開き人影が現れる。アヤカに姿を見られた、と思って硬直する

が幸いというべきか、扉の向こうから現れたのはアヤカとは別の女性、成人のアンドロイド。

目が合いそうになる一瞬前、悠斗は踵を返すと一目散に駆け出していく。「おや。別に入るくらい良いんだが。ま、大人になったら来なさいな」

微妙な勘違いをした店員のアンドロイドは名残惜しそうに少年が消えた通りを眺めていた。

一週間ほどがたったある日の放課後。

扉を開いて悠斗は薄暗い部屋の中を覗き込む。

手探りで壁際のスイッチを探し当てて灯りをつければベッドのような整備台や工具類が照らし出される。

近寄ってよく見てみれば僅かに埃も積もっていてしばらく使用された形跡はない。

ここは校内の整備室。アンドロイド生徒が不具合や故障を起こした時用の保健室のようなものだが、アンドロイド達は通常の使用範疇ではそうそう故障することもなく、稀に体育で破損した生徒が担ぎ込まれてくる程度だった。

生徒の立ち入り自体は自由だが、人間の生徒が一人でいるのがわかれば奇異な目で見られはするだろう。

戸惑っているような、緊張しているような表情の悠斗は手持ちのティッシュで整備台の埃を払っていく。

小さなため息を付いた悠斗は内ポケットから取り出した封筒を開け、中の手紙を広げて眺める。

『お願いがあります。今日の放課後、学校の整備室で待っていてください。』

市ノ瀬アヤカ』

印刷されたのかと見間違い綺麗な文字でしたためられた短い文。登校してきた悠斗の机の中に入っていた封筒。

どういふことなのか気が気でなく、経の授業の内容はさっぱり覚えていない。

「ホントに来るのかな……」

ぼそり、と呟いた時。その言葉に呼応したかのように静かに扉が開く。

びくりと方を跳ね上げながらゆっくりと振り向けば、大きな藍色の瞳と目が合う。

「ありがと。来てくれたんだね。櫻井クン」

間違いなくそこに立っているのはアンドロイドにしてクラスのアイドル、市ノ瀬アヤカ当人だった。

悠斗の方を向いたまま背中扉を閉め、手探りで鍵をかけるとゆっくりと歩いてくる。

気のせいかその顔は紅潮しているようにも思える。

小柄な悠斗の身長はアヤカが目線程度。近くまで寄られれば身長差が際立つようで軽いコンプレックスに駆られる。

「あの、さ。ちょっと確認したいんだけど。櫻井くんって機械の修理とか詳しい系？ ……ほら、たまに中野くんとかとそういう話してない？」

中野というのはゲーマー気質のクラスメートで、ぼっちの悠斗としては親しい部類。確かにたまに PC の拡張や彼の家のロボットの修理のアドバイスをしていたのは事実だが。そんなに会話に熱が入っていた……ような気はする。

「は、はい……まあ、それなりに……」

何故そんな事を聞かれているのか理解できぬまま、ともかくアヤカにいいところを見せたい一心でスマホに入れていた写真を見せる。

一年ほど前、中学校の工作部で出した自作ロボットコンテストの賞状。

ジュニア部門の小さなコンテストでマニアにとってはさほどの意味もないものだったが、悠斗が自慢できる数少ない事。

夢中になって見せてからしまった、呆れられるかも、と恐る恐るアヤカを見上げるが。

「マジ！？ すっご！ やっぱそういうの得意だったんだ。……そっか。じゃあお願いしたいことがあるんだけど……」

目を丸くしたアヤカはカバンを開けるとビニール袋に包まれた冊子一式を差し出す。

悠斗が目を落とすとその表紙には「家庭用アンドロイド：リリスシリーズ KFA-A11S 設定名称：市ノ瀬アヤカ 取扱説明書」の文字。

冊子を手渡そうとしているようだが恥ずかしげに目をそらすアヤカ。

「こ、これ。アタシの取扱説明書、なんだけど……なんか、その。アタシさ、故障しちゃったみたいで……修理してくんないかな……？」

「な、なるほど……って、え、ええっ！？ な、何言ってるんですか！ 僕なんか頼まなくてもメーカーに頼めばいいじゃないですか！ ほ、ほら説明書にも「本製品をご自分で修理・分解・改造しないでください」って書いてあるでしょ！」

「う、わ、わかってるって！ ちゃんとしたところに頼めないからめっちゃ

困ってんじゃない！ そ、その……もう自分で改造……しちゃったんだってば！」

「え？ か、改造……」

先日、電気街で彼女が入っていった店を思い出す。いや、そんな。彼女一人でパーツ購入できるはずは。

「ひ、秘密だよ……絶対、絶対秘密だかね！」

真っ赤になったアヤカはどさり、とカバンを放り出すとブラウスに手をかけ、ためらいがちに一つ一つゆっくりとボタンをはずしていく。アンドロイドに健康的、というもおかしなものだがそんな印象を与える、ごく僅かに日焼けしたような肌が晒されていく。

こちらがロボットのごとく固まっている悠斗と目を合わせず、フロントホックのブラジャーを外せば押さえつけられていた双丘がこぼれ落ちてふると弾む。気のせいかな、その頂きはツンと尖っているように見える。もはや呻くこともできぬ、真っ赤になった少年に、自分も手を震わせながらアヤカは説明書を開いてページをめくる。

「ショ、ショップとかメーカー以外の人にさわらせんの初めてだからね……。ちゃ、ちゃんと説明書読んで！ ほら、ここの「メンテナンスハッチの開き方」！」

もはや状況を飲み込むことができず、ただ頷いて説明書の通りにただ手を動かそうとする。

デフォルメされた女性のイラストの左胸の中央部突起を矢印が示している。

『・上半身の衣服を脱がせ乳房を露出させたのちに、左乳房に刺激を与え左乳首の勃起を確認します。 ※機能停止中も数回乳房に刺激を与えることにより勃起します。勃起しない場合は「故障かな、と思ったときは」を参照ください。

- ・左乳首を左側いっぱい回した後「カチっ」と音がするまで強く押し込みます。
- ・左乳房から手を離します。数秒後、左乳房が開放されメンテナンスパネルが露出します』

何も考えられぬまま、プログラムされたロボットのごとく悠斗は指を動かしていく。

「ん……あっ！ ぴ、きゅうっ！ メンテナンスハッチオープン……ふぁ……あん……そ、そっと……いじってよお……」

「ご、ごご、ご、ごめんなさいっ！ あ……！」



誤りながらも開いていくアヤカの乳房から目を離せない。

人体そのものの魅惑的な乳房が外れるように外側に開いてアヤカの内部機構が晒されていく。

悠斗にとってはある意味、乳房そのものよりも興奮してしまう光景。その事が悟られようとも、その中を覗き込みたいという欲望は抑えきれなくなっていく。しかし。

内部機構の中央に明らかに後付のように差し込まれた回路。そこだけ他のものと色合いが異なり、少し古ぼけているようにも思えた。

……そうだ。どこかで見た記憶がある。確か、こんなパーツの配置の回路が。

「い、市ノ瀬さん……こ、これって……」

「……快楽中枢回路。えっちなことするためのやつ。……自分でつけてみたんだけど。そしたらその……体がむずむずするっていうか……せ、性欲エラーってのがいっぱいでて……。外そうとしたんだけど、そしたらシステム停止警告とかでちゃって……。お願い！ この回路、安全に外して！ そうしないとアタシ……こわれちゃいそう……び、きゅう……っ！」

「あ、え、ええと……事情はわかりましたけど……き、聞いていいのか、ですけど……なんでまた……」

本来、セクサロイド機能は高校を卒業するまでは使用禁止だ。あの店でもアヤカが購入できたとは思えない。

「なんで、ってそりゃ……。あ、櫻井くんは人間だからわかんないか。だってさ、人間の友達……玲香とかあの辺、えっちな話大好きなんだよね。フカシだとは思うけど彼氏と昨日の夜どうのこうの、とか言ってくるのよ。……ずるいじゃん。人間だけ子供の頃からできるとか。だからちょっと前からセクサロイド用のパーツショップ行ってみたんだけど。やっぱ売ってもらえなくて。悔しいから裏道に合ったジャンク屋みたいなトコで買った。やすかったし」

「ジャンク屋って……ああ、そういうとこなら年齢確認もないかもですね。なるほど……」

「うん。そんで帰って自分でつけてみたら……なんかエラーがでるし！ 胸はこんななっちゃって戻らないし！」

言いながら張り詰めて乳首も尖っている右胸を指差す。

動きに合わせて小さく揺れる乳房と点滅する回路に悠斗の股間のはち切れそうになっているが必死なアヤカは気がついていないのか、そのままま

くしたてる。

「ね！ マジ一生のお願い！ こんな、パパやママにも相談できないし、一人で修理受付とかできないし……。お願いっ！ なんとかしてほしいの！」

「わ、わかりました……と、ともかく安全に外すには電源落とさないと、ですけど……。取り付けたときは自分でやったんだから当然、電源オンのままつけたわけですよ」

「うん。一応、説明書見るとアタシ、このスロットは起動中のつけ外しOKってあるけど……。まずかった？」

「良くはないですね。ましてや壊れかけてるような状態だと。いいですか？ 整備台に横になって……」

「そっかあ……。わかった」

こくん、と頷くとアヤカはベッドのように整備台に横たわる。

もう一度、悠斗は説明書を開き電源スイッチのいちを確認すると左胸の中、マークの書かれたボタンを押し込む。

「び、きゅ。シャットダウンを行います……。シャットダウンまで12秒……。じゃ、よろしくね。櫻井ク……」

小さな笑みを浮かべて悠斗を見つめた直後、かくり、と首を横に倒してアヤカの機能は停止した。

時を止めたアヤカの胸に工具を差し込み、快楽中枢回路につながるコネクタを一つ一つ外し固定ネジを取り外す。

憧れの存在だったアヤカが今、目の前で機能停止してその乳房の中を弄り回している。

今朝型までは想像もできなかった、いや、密かに想像したことはある光景だが。まるで現実感を欠いて自分が自分でないような感覚に惑わされながらも作業は進んでいく。

回路を一つ取り外すだけ、と思えばそう難しい作業ではない。程なく快楽中枢回路は取り外されて整備台の傍らに置かれる。

「よし、これでいいかな。じゃあ電源を……」

電源が落ちて硬度を失った右の乳首が目に入ると少しだけ名残惜しいような気分に関われるが、邪な心を抑え込むように電源スイッチを押し込む。しかし。

「び、きゅ。……。家庭用アンドロイド：リリスシリーズ KFA-A11S：設定名市ノ瀬アヤカ。人格エミュレートモードで起動を行います。……。びぎゅ。」

エラーコード：0x17100D5。登録されているデバイスが接続されていません。起動に失敗しました。シャットダウンを行います」

虚ろに眼を開いたアヤカはシステムメッセージを読み上げると起動を中断、灯っていた旨の回路の光も失われていく。

「え？ あ、あれ、市ノ瀬さん……？」

物言わぬ人形に戻った彼女に慌て、タブレットを取り出してエラーコードと起動失敗の原因を検索する。

「エラーコードで検索すれば何か……あ、これかな……え。こ、これは……どうしよう……」

一時間後。再び悠斗が電源スイッチを押し込めば回路が小さな唸りを上げて灯っていく。

「び、きゅ。……家庭用アンドロイド：リリスシリーズ KFA-A11S：設定名、市ノ瀬アヤカ。人格エミュレートモードで起動を行います。……接続デバイスの形式が不明です……びゅ、きゅ。い。起動します……。ん……あ、櫻井クン……。あ、あれっ！ 回路、ついたまんまじゃん！ おっぱいも張ったまんまだし！」

起動と同時に僅かに膨らむように張り詰め始めた右乳房に手を当てながらアヤカが抗議する。

濟まなそうに肩を落とした悠斗がタブレットの画面をアヤカに向けて。

「ごめんなさい。起動ログ確認できますか？ 快樂中枢回路外すと起動失敗しちゃうみたいで……。社外品の適合しない快樂中枢回路つけるとたまに起こってる現象みたいです。一度組み込んで認識した後に外すと起動できなくなっちゃうみたいで……。たぶん、アヤカさんが自分で無理矢理外してたらその瞬間機能停止してたかと」

「そ、そんなっ、めっちゃ困るっ！ なんとかなんないの！」

「色々検索してみました但メーカー修理しかないみたいです。無理にいじるとそれこそ本当に壊れちゃうかもしれませんし、電子頭脳の設定いじるのはさすがに……」

そんな高度な作業を行う自信はないし、万が一にもアヤカの人格モジュールや記憶回路を壊してしまうことを思えばとても手は出せない。

「やっぱり、家族に相談するほうが……」

「それはダメ！ そんなの恥ずかしすぎるっしょ！ ……櫻井クン。快樂中枢回路のエラーって調べてくれた？」

「え、ええ。……はい」

俯く悠斗にずい、と顔を寄せるアンドロイドの少女。

「で。どんなだった？」

「そ、それは……全部、性欲エラー、です。回路が不適合で性欲の制御がおかしくなっていて。それでアヤカさん自信の電子頭脳の処理領域が足りなくなっていて全体的に不具合がおこってるんじゃないかと……」

もじもじと、どちらが乙女かわからない様子でつぶやく。

「……わかった！　じゃあ。二人でえっちしよ、櫻井クン！　性欲解消すればエラーはなおるっしょ！」

「は、はああああっ！？　なにを、いい、いちのせ、さ……！」

覚悟を決めた、という形相のアヤカに悠斗はたじろぎながら後ずさる。

「あ、あれ？　こういうときは男子ってうおおお、って飛びかかってくるんじゃないの？　……あ。そっか。他に好きな子いた？　そしたら……それはまあしょうがないか……」

「い、いや、そうじゃない、そうじゃないですっ！　でもそ、そういうのは、もっとちゃんと……」

「あ、えっち、っていっても女性器ユニットはついてないから本番なしってやつになんのかな？　いや、女性器ユニットの中古とかそれはないなー、って。まあほら、どのみち子供できたりはしないし……ダメ？　どうしても？」

「だ、だめとかそういうのじゃ……あっ！」

アヤカの目線が悠斗の下半身に落ちていく。自然、すでに限界以上に膨れ上がった股間が目に入れば目を丸くするアヤカ。

「わお。け、結構、おっきくない……？　あ、あのさ。修理頼んだのも……だ、誰でも良くはなかったんだよ？　あ！　ひょっとしてこのカッコ、恥ずかしくないとか思ってる？　んなわけないっしょ！　もう最初っからクロックあがりまくって、エラーも増えて！　たいへんなんだかんね！」

彼女が吠えるように迫りながら自らの胸の点滅する回路を突きつければ、さらにたじろぐ悠斗。

「ぶっちゃけ、最悪もうそれしかないかなー、って思っただけだよな……。ひょっとして気がついてない？　櫻井クン、結構女子人気高いんだけど……成績いいし、ちっちゃいけど顔もいいから可愛いって……だ、だから。そろそろほっとくと……誰かに取られちゃうかなって思ったら……。もう覚悟決めて、告白してみよっかな……とか」

「な、なる、ほど……え？」

聞き間違いだろうか。あの市ノ瀬アヤカが、自分のことを。

「うん。実は……入学式の時からマジで一目惚れ、でした。それで……櫻井クンがロボマニアっぽいなって思ったらこれはいけるんじゃない！ とか思ってたけど……ど、どう？ ……好きです。櫻井……クン。ちょっと故障したロボットになっちゃったけど……どう、かな？ つきあってくんない……かな？」

一糸まとわぬ姿のアヤカの股間は金属プレートのカバー覆われ、その周囲にはコーションマークや注意書きが印刷されている。

首筋や手足の肌に数か所分割線が浮かんでいるのを見れば、彼女が工業製品であることを改めて認識させられるが、悠斗はその事に帰って興奮を覚えていた。体温は上昇し、股間はずではち切れそうなほど勃起している。「じゃ、じゃあ……お願い……。最初はそとで……ね」

「は、はは、はい……」

乳房のハッチを閉じたアヤカが整備台に腰掛け、悠斗はその後ろから抱きしめるように肌を触れ合わせる。

熱いくらいの体温が胸板に伝わる中、掌に余るサイズの双丘を掴んでゆくりと揉み始める。

「……んっ！ はあ……く、ん……っ！ 自分でちょっといじってみただけ……やっぱり人にいじられるとなんかちがうね……。き、きもちいい、よ……び、きゅ……あ。やだ、ノイズ漏れちゃう……。ご、ごめんね」

「い、いえ。大丈夫……止めないでいいです……！」

悠斗の手の中で乳房の内部機構が作動して、さらに張り詰めて乳首も固くなっていくのが感じられる。

自分が与えた刺激でアヤカの機能が動作しているのを感じれば、悠斗の興奮はさらに高まり、手の動きも止まらなくなっていく。

「ん、あ……ふあっ♡ も、もっとお……。ね、櫻井クン……。こ、こっこのスイッチ……いじってみて……」

小さな声をあげながら、悠斗の右手を自分の右乳首に沿わせていくアヤカ。

柔らかな人造皮膚の上に乗る硬い突起の感覚にさらに興奮はましていく。

硬度を増しながらも弾力がある特殊シリコン製の乳首を回せば、かち、という内部機構が動く感触が指に伝わる。

「ぴゅ、いっ♡ せ、性感帯感度の変更され、ま、まし……んあああああっ♡ あ、ひああああっ！ や、き、きもちいいよおおおっ！ さ、櫻井、クンっ！」

我慢できない、という様子でアヤカは体ごと振り向き悠斗を抱きしめながら唇を重ねていく。

「い、いちのせ、さ……む、あ、あああ……」

「さくらい、く……がびっ！ か、かか、快樂中枢回路負荷が上昇、しし、現在温度が92.1℃、興奮度制御に失敗、ししっ！ ……あっ！ や、やばっ！ お、オーバーヒートするっ！ メンテハッチあけてっ！ はやくっ！ ん、あ、ああああっ♡ がびいいいっ♡」

自らキスをしたことでエラーを起こしたアイカが悶えて整備台の上で痙攣する。

ブリッジを作りながら悶えるアヤカに脳を焦がされるような興奮を覚えながら、悠斗は左乳首のスイッチを捻りこむ。

直後、乳房の谷間に分割線が浮かび上がり左乳房が開いて熱気が吹き出してくる。

「びゅ、がび……現在温度81℃に低下し……はああ……♡ こ、こわれるかとおもったあ……。ん……？」

再び内部メカを晒して乳房を震わせるアヤカの姿に、もはや悠斗の股間は結界寸前だった。情けない姿を見せたくない一心で蹲って股間を押さえてうめき声を漏らす。

「……あの、さ。ひょっとして、だけど。……でちゃいそう、ってやつ？ だったら、さ」

潤んだ目と上気した頬が悠斗の顔に寄せられ、股間を押さえたている手にアヤカの手が重ねられる。

「いじっても……いい？ あ、アタシばっか気持ちよくしてもらうのもなかなか……って思ってたから……一緒に、きもちよくなる？」

にま、と輝くような笑顔を浮かべるとアヤカは少年を押し倒し覆いかぶさっていく。

有無を言わずはち切れそうな悠斗自身を軽く握ると右乳房を胸板に押し付け小さくあえぐ。

「い、いちのせ、さ、だめ、でちゃう……」

「だしていいっていいんの！ 櫻井、クン、すき……」

小さく呟いて再び唇を重ねれば。悠斗の中で理性の糸がぷつ、と音を立てて。

「市ノ瀬、さ、んっ……！ 僕も……すき、ですっ！ ぼくも、初めてみたときから……！」

かち、かち、と今まで以上に右乳首をまわしてしゃにむに乳首を揉みし

だく。

汗に濡れた指先で、傷ついた快樂中枢回路に触れれば。

アヤカの胸の中全体がカラフルに点滅し、再び温度が上昇し始める。

「ぴゅああああっ♡ ひ、あひいいいっ！ か、感度設定、たかす、ぎいいい♡ らめっ！ おっぱい、きもひよすぎ……みぎゃあああっ！ お、温度、おんど、またあがってるうう♡ だめえええっ！ アタシ、アタシ、こんなの、きもひよすぎてこわれちゃ……あああああっ！ こわれちゃう、よおおおっ！」

「あーあああああっ！ いちのせ、さ、だめ、そんなつよく……あ————っ！」

叫びを上げたアヤカの手が少年を握りしめれば、もはやひとたまりもなく盛大にアヤカの腹目掛けて白濁液が吐き出される。

「ひぎいいいっ♡ なな、なに、これええっ♡ や、だめ、こんなのしよりできな……びぎゃああああっ！ こわれるううっ！ ここ、こわれ、こわれ、こわれれれ……もう、だめええええ♡ がぴいいい————っ♡♡」

同時に乳房を握りしめられたアヤカは生まれて初めての絶頂に達して。

制御を失った表情で痙攣を続け、左胸からは冷却ファンを全力稼働させながらノイズ混じりの絶叫を上げたアヤカは、力尽きてそのまま少年を押しつぶすように、呆けた顔のまま機能停止した。

夕日が差し込む廊下、整備室の扉から鍵が外れる小さな音がするとアヤカの首がそっと廊下を覗き込む。

「ん、おっけ。誰もいないみたい」

アヤカが手招きをすると、その手の下をくぐって悠斗が廊下に進み出る。

無人の廊下を少年と少女が並んで歩き出すが、どこか憔悴したようにも見える悠斗と足取り軽く、つやつやとした笑みを浮かべるアヤカの様子は対象的だった。

「……あー。櫻井クン、疲れちゃった？ ごめんね、アタシはまだまだバッテリーあるからそういうの気が付かなかったカモ」

「い、いえ……。その……なんか、まだ信じられないというか……」

「あはは。アタシも……櫻井クンとしちゃったとか、ちょっと実感わかないっていうか。だけど……」

まだ桜色に染まっている頬を寄せ、悠斗の目を正面から覗き込むアヤカ。

「アタシたち、恋人……でいいんだよね。もう」

真摯な問いに声も出ず。ただ悠斗が頷けば満面の笑みが輝いて。

「うん！　じゃ、これからも性欲解消もよろしく！　そうしないとアタシ、壊れちゃうから……お願いね。悠くん！」

「あ、は、はい……アヤカ、さん……！」

誰もいないことをもう一度確かめると、アヤカは真っ赤に染まった悠斗の顔に唇を重ねていった。